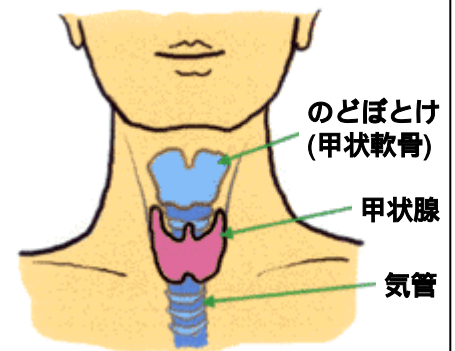


[第14回] 甲状腺の病気

甲状腺は喉仏のやや下に張り付くように存在する内分泌器官です。ここから分泌される甲状腺ホルモンは、全身の組織のエネルギー代謝を維持し、種々の臓器が最適な状態で機能を果たせるように作用しています。すなわち、私たちの日々の活動を調節していることができます。

この器官の病気は主に次の三つに分けることができます。

1. 甲状腺機能亢進症
2. 甲状腺機能低下症
3. 甲状腺腫瘍



1. 甲状腺機能亢進症

甲状腺ホルモンの分泌が異常に増える疾患です。ほとんどの場合は原因が不明で、一般的にバセドウ病と呼ばれています。1000人に1人の割合で発症し、女性は男性の4～5倍かかりやすく、20～40歳代に多くみられます。主な症状は、手が震える、体がだるい、暑がる、発汗が多い、脈が速い、食欲があるのに体重が減る、などです。また、首の前面が腫れたり、眼が大きくなった感じを受けたりすることもあります。甲状腺ホルモンとその分泌を促進するホルモンを測定すれば比較的容易に診断がつきます。治療は、一般的には甲状腺ホルモンの分泌を抑える薬を内服します。重症でなければ入院する必要はなく、通常の仕事しながら外来で治療することもできます。定期的に甲状腺ホルモンを測定し、安定したら徐々に薬を減量していきます。

2. 甲状腺機能低下症

甲状腺ホルモンの分泌が減少する疾患で、多くの場合は慢性甲状腺炎（橋本病）によるものです。発生頻度は500～1000人に1人で、やはり女性に多く、年齢はバセドウ病よりやや高齢者に多いようです。無気力、物忘れ、眠気、反応が鈍いなどの症状があり、うつ病や認知症と間違われることもあります。特に高齢者でうつ病や認知症を疑ったら、この疾患を思い浮かべることが鉄則とされています。この疾患も、甲状腺ホルモンを測定すればすぐ診断がつきます。この疾患も重症でなければ外来で治療を受けることができます。こちらは、甲状腺ホルモンと同様の働きをする薬剤を内服しますが、薬が効いてくると劇的に症状が改善し、別人のように元気になり受け答えもしっかりしてきます。ただし、薬は原則的に生涯飲み続ける必要があります。

3. 甲状腺腫瘍

結節性甲状腺腫とも呼ばれるように、甲状腺の中に腫瘤ができる疾患です。良性腫瘍と悪性腫瘍があり、また甲状腺ホルモンを分泌するタイプのものであるので、きっちり精密検査を受ける必要があります。良性腫瘍であれば、多くの場合は治療を必要としません。また、悪性腫瘍にもいくつかのタイプがあり、多くの場合は手術で摘出すると予後は良好ですが、急激に進行し転移もはやいきわめて悪性度の高いものもあります。

いずれにしても、前述した症状が続いたり、また首の前面が腫れたり腫瘤を触れたりした場合には、すぐ病院を受診してください。どの診療科に行くべきかよく聞かれますが、最初は内科でご相談ください。外科的検査や治療が必要と判断された場合には外科や耳鼻科を紹介いたします。